日刊 動労千葉

84. 7. 3
No. 1680

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二(22)七二〇七

# 第3回 労働学校（聴講・A生）に参加して

## 感想文

今回は、立正大学教授・浅田光輝氏による「マルクスの思想体系――資本主義の社会と国家――」と題する講義でした。正直言って、入口で手渡された「講義の概要」を見て、授業の始まる前から圧倒されてしまいました。なんだかむずかしそうな題名の本がずらーと並んでいて・・・、「これは大変だ。こんなむずかしい話をきいて、わかるかなあ・」と、心配でした。でも、周りの人たちの様子もみんなそんな感じだったので、少し安心して、それなら自分のわかる所だけでも一所懸命かじってやろう、と居直ると少し気が楽になりました。

この労働学校も三回目に入って一寸気にゆるみが出てきているのか、生徒の側で集合時刻と出席が少しルーズになっていたのでは、と感じました。私の感想を言うと、やはり一回毎の授業が終った段階で、「次回」の講師やテーマ、あるいは獲得すべきねらい、更にできれば（後日でもいいのですが）最低限準備しておいた方がよい予習事項なり、手軽な入門書・参考書などの紹介をしてもらえれば、少しは準備して参加しようかなという気持も出るのではないか、とも思いますが、どうでしょうか。

## 「マルクスの思想体系―資本主義の社会と国家―」

### ＝立正大学教授・浅田光輝先生の講義から＝

講義は定刻より少し遅れて13時30分頃より始まりました。初めに、司会の片岡教宣部長より、講師・浅田先生の紹介と、このテーマの学習を通じて労働者階級の解放の武器をつかみとっていく糸口としていってほしいとの主旨説明とあいさつをうけ、さっそく授業に入っていきました。

「マルクスの思想体系――資本主義の社会と国家――」の講義の前半で浅田先生は、18世紀～19世紀のヨーロッパで古い封建体制が崩れて新しく資本主義の社会体制が生まれ・発展していった過程を話され、その激動していく時代の中でマルクスがどのような事態に対決し、問題意識をもって社会や人間への考察と分析、あるいはその批判や変革への実践活動へとたちむかっていったのか、について解説されました。

（Ⅰ、資本主義批判の体系としてのマルクスの思想形成）

講義は、時おり、当時の社会情勢やマルクスその人の生いたちやエピソード等もまじえて（・このあたりは面白かった。いつかまた時間をたっぷりとってやってほしいと思う）、まず、

①、マルクスの生きた時代＝資本主義の発展――近代市民社会の形成。「人権」と「自由」の確立。しかし、共同体社会は「私的利益の追求」の原理のまえに公共性を喪失し、「市民社会」と「国家」の分裂＝私的利益と公的利益の分裂という現象にますますつき進んでいく。

②、そしてマルクスは、これら「市民社会」を考察した先輩格のスミスの経済学や、ヘーゲルの法哲学を学び、批判し、いく多の社会的実践の中でそれらをのりこえて、遂に「資本主義の社会と国家」の全体像を科学的にしっかりと把握することに成功する。

③、すなわち、「マルクスの思想形成」の過程は、まず「ヘーゲル批判（国家論）」にはじまり、――→「近代資本主義国家」を把握していくためには、どうしてもその土台である「資本主義経済の本質」を解明しなければならない、ことをつかむ。――→そして、生涯の盟友・エンゲルスとの共同作業を通じてマルクスは経済学に抜本的にとりくみ、やがて、この世界が「利潤の生み出し」のみを唯一の目的として活動する「資本が万能」の世界であり、人間（労働者）はますます人間性を喪失し、社会はますます共同性を喪失していくものであることをつかみ出し、立証し、はじめて論理的に体系化した。（『資本論』への過程）。

④、そして最後に、講師＝浅田先生は、「・『資本論』は未完の大作。国家論の追求に出発したマルクスの資本主義批判の体系は、経済学からふたたび国家の問題へとかえってゆく方向をもったのではないかと考えられる。マルクスにおいて、経済学と国家論は一体である」という内容で『前半』の講義をしめくくられました。

＃　＃　＃

中間の休憩をはさんで、『後半』では、主に、「資本主義による私的所有の完成」は、共同体を『公』と『私』に解体し、市民社会と国家の分裂をもたらす。こうして人間社会が失った『共同体と人間』を新たに再建（奪還）するものとしての「共産主義」の思想と実践――の問題を解明され、その歴史的担い手としての労働者階級の役割について述べられました。（Ⅱ、市民社会と国家―マルクスの資本主義批判の体系）

（裏につづく）

第3回講座の浅田光輝先生（６月３０日・労働学校）

後半のところは、5月におこなわれた第一回目の鎌倉孝夫先生の講座「資本主義経済の仕組みと矛盾――経済原論」で習ったことを想い起こしながら聴いたのですが、私には少しむずかしくて、講義の半分位はわからずじまいでした。あとで録音テープをお借りして、ゆっくり考えながらおさらいしてみようと思います。

□　□

## つかみかけた「糸口」を大切に、今後もがんばって勉強していきたい

「感想文を書いてくれ」とせかされて、消化不良のまま書きならべたわけですが、あらためてずい分濃い内容の問題を正味三時間半ぐらいの講義で頭の中につめこんだ感じで、少々パンクぎみです。

でも、マルクスという思想家＝革命家が、どういう問題意識で現実の社会や人間について考え、かかわってきたのか、又、一連のヘーゲル批判の著作にはじまり『資本論』にまでいたるあんなにも厖大な主張や著作をもって訴えたかったことは何だったのか、について、少しわかってきたような気がします。

「講義の概要」の中で、書かれていた、「国家論→経済学→再び国家論、というマルクスのとった道すじ」「マルクスにおいて、経済学と国家論は一体」「それは、資本主義批判の体系である」「資本主義体制のもとで人間社会が失ってきた共同体や人間性の喪失。そして、これをとりもどすものとしての共産主義」「その歴史的にない手としての労働者階級」という今回の講義目的のことばに大きな自信をもつことができました。

今までにもよく、「マルクス主義は労働者階級（人間）解放の哲学」「実践・変革の哲学」という意味のことを聞いたことがありますが、その輪かくにふれることができたような気がします。

私なりに、この講座（および、第一回、第二回の講座も含めて）を通して感じたことの一つは、マルクスにあっては、「経済学」というのは、単なる学問的研究分野ではなく、資本主義社会体制の本質や矛盾を解明し、その矛盾した社会体制を打倒・変革していく（国家論）あるいは本当の人間解放をかちとっていくための武器としての極めて実践的な役割をもったものなのだ、ということでした。

ということで、とにかくむずかしい事の方が多かったですけれども、このつかみかけた「糸口」を大切にして、今後、自分なりにいろんな現実問題をひきよせて勉強し追求していこうと思います。

たかだか三回目ぐらいでもうアゴを出しそうな面もありましたが、気をひきしめて、何とかこの一年間をとにもかくにもがんばってのり切っていきたいと思います。

（おわり）